

だから非常に大きな話ですね。展望としてはすごく大きなことを問題にするわけですが、僕はここで話すことが、これが最後になるかもしれない。まあこれから何回かできるかもしれないけれど、これが最後になるかもしれないので、それに相応しくね、今まで僕が考えてきたことの根本を、大きなアスペクトで皆さんに訴えかけてみる、皆さんと一緒に考えてみる、こういう機会を持つと、こういうことですね。

まず「精神革命」と「科学革命」、これはここにご出席の方はすでにご承知かもしれない。僕の文明論の枠組みには「五段階説」というものがある、全人類的な規模で今まで五つの大きな転換点があった。それは「人類革命」、「農業革命」、「都市革命」、そして「精神革命」が四番目、「科学革命」が五番目の大きな変革期で、今やその「科学革命」以後のもう一つ大きな現代という転換期、これを「環境革命」という言葉で僕は言っているけれど、そういう文明史の段階を踏まえた概念であるということは、多少私の本などを読んでくれる人はすでにご存じだと思う。

「精神革命」

念のために言っておくと、「精神革命」というのは、紀元前の六世紀から五世紀ぐらいにかけて、世界的な規模で、何ていうんでしょうかね、人間の精神の発見、人間自身による人間の

心の発見、別の言葉でいえば我々の内部世界、心の世界を自覚するということが起こった、それに対する考察を持つということ。もちろんその前にエジプトには魂の概念もあるんですが、それを主題として取り上げることはなかったでしょう。

この「精神革命」には、ギリシア、イスラエル、中国、インドと四つの文脈があります。この四つの文脈を知らない方もおられると思うので簡単に述べると、この四つの地域に並行して起こった「精神革命」には四つの類型があった。

まずギリシアですが、今日は時間がありませんから、麗澤大学から出ている『比較文明研究』に書いた僕の論文に任せて詳しいことはお話ししません。ただ簡単な要約をしておけば、「ギリシアにおける精神革命」は、ソクラテスによる「プシユケーの発見」、「魂の発見」——「プシユケーをいたわれ」 「プシユケーを大切にせよ」という宣言に始まります。その「魂」は何を見るかという「アイデア」を見るんですね。「プシユケー」が初めて発見されて、その「プシユケー」の対象として「アイデア」というものを見る。そしてその「アイデア」の最高のものとして「善のアイデア」というものが取り出されるけど、これはプラトンまで繋がっていくでしょう。そういう系譜なんですね。

それから第二番目、「中国における精神革命」は、周の時代、古い周の時代の「天」そのものが地上に引き下ろされて人倫化

される、それが「道」になるわけですね。「朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり」、これは孔子の言葉ですけど、そういう「道」になる。孔子の「儒教」はこうしてできるわけだけど、その中心になるものは、最初は「礼」だったんです。しかし、その「礼」の根底には「仁」ですね、「礼」の底に「仁」がなければいけないということが孔子によって発見された。「仁」があることによって本当の「礼」も生きる、「仁」がなきゃいけない、これが「中国における精神革命」だったわけです。

それからインドではブッダですよ。創始者というか、「インドにおける精神革命」です。これは何を問題にしたかというのと、「苦」です。苦しみを抱えて生きている、この「苦」の根源は何なんだ、そこから解放されるためにはどうしたらいいんだ、ということですよ。で、「苦」の根源は「執着」だということなんですよ、ね。何か絶対のものとして、「実体」として変わらないものがあって、それに「執着」する、それが「苦」の本となる。ところが実際はそういう変わらない「実体」なんていうものはないんで、あるのは「縁起」なんです。続いていろんなものも起こっていく、一つの流れのようなもの、それが「空」に他ならない。「空」っていうのは空気の空ですね、カラという。これは「縁起」に他ならないわけです、この「空」というのは、「シューニヤ」(śūnya) ですね。そしてこの「空」の認識に至って、初めてそこから「慈悲」というものが出てく

るんですね。本当の人の人に対する「慈悲」というものがそこから出てくる。だからその「空」の認識がなかったら出てこないですよ。

それから四番目は「イスラエルの精神革命」、これはイエスによるわけです。これは皆さんご存知でしょう。イエスが出る前にユダヤ教というものがあって、ユダヤ教というのは神が作った「律法」というものを厳守する、それをきちんと守っていくということになっているけど、それがだんだん形式化しちゃうんですね、内実を失って。そうすると、これは神の定めものだったというので、些細なことで、「律法」で人間を縛り上げる。ユダヤ教はそんなふうになってきてしまったんですね、イエスのとき。そこでイエスは、その「律法」の形式性、人間の幸福じゃなくて人間の束縛、人間を縛り上げる道具になってしまった「律法」に反対して、直接的な「神の愛」である「アガペー」、これを言い出したわけです。そしてユダヤ教を超えた。これが「イスラエルにおける精神革命」です。

「横への超越」

ところで、その精神革命の帰結として出てくる「善のアイデア」、ギリシア語で「アガトン」(agathon) という。それから中国における「仁」、中国ではレン (rén) ですね、発音はね、日本語ではジン、仁愛の仁です。それからインドでは「慈悲」

です。これは「マイトリー・カルナー」(matrīkarnā) という。それからイエスの「愛」、「アガペー」(agapē) です。

この「精神革命」で引き出されてきた結論というものを考えてみれば、これは本質的に言って「対人関係の原理」じゃないですか。つまり、他者に対する我々の「生き方の行動原理」を示していることに気がつく。出されてきた一番究極的な結論を見ればそういうことになるわけですね。他者に対しての我々の「生き方の行動原理」、「対人関係の原理」、そういうものだとわかっていくことが分かる。

これらの「慈悲」だとか「愛」だとか「仁」だとか、そういうものを、私は、今までとは違ってですね、「横への超越」という概念をここに出してまとめあげようとするわけです。これを「横への超越」(lateral transcendence)、あるいは「水平超越」(horizontal transcendence)と呼んでおきたい。

そしてこの「横への超越」の対象となる「他者」というのは、この「精神革命」の時代においては、他の人々です。よね、他の人々。自分とそれから他におられる方々みんなです。「精神革命」においては、人と人とを結びつける「絆」、結びつけるもの、それが「横への超越」なんです。

それはやっぱり「超越」なんです。自分から出ていくんです。相手と結びつくっていうことはやっぱり「超越」なんです。だけど「横への超越」なんです。同等の資格を持った

「横への超越」です。

だけど現代においては、この「他者」というのは人間だけじゃなくてね、人と人との関係だけじゃなくて、「自然」という「他者」もあるわけですね。ですから「他者」には今、「他人」という「他者」、そして「自然」というもう一つの「他者」があるということなんです。ね、こちらも考えなきゃいけない。で、これがだんだん「科学」と「宗教」の問題に入っていくことになるんです。

ですから、「他者」との関係、「他者」との相互関係、これを自覚的に作り上げる、これが「横への超越」の本質なんです。ね。今言ったのは僕の考えです。

「縦への超越」

ところが紀元前五、六世紀の「精神革命」においては、そのような「横への超越」が「縦への超越」——これは vertical transcendence ですよ、ね、垂直超越——によって媒介されると考えた。この「縦への超越」には「上へ」と「下へ」の超越があるわけで、「上へ」超越するのは何かって言うと、「神」です。これはもう宗教の本質ですよ。ね。「神」、「上へ」超越する。そして「神」が汝を愛したように、汝は隣人を愛しなさい、こういう構造になるわけです。だから「人間」と「人間」の関係が、「神」と「人間」の関係に一度上がっていったってね、そして

戻ってくる、そういう構造になっている。

で、「下への超越」っていうのはどういうのかというと、これはインド哲学、仏教における「シューニヤ」ですね。「空」が中国へ入って「無」になるわけ、「無」に化けるわけだ。これは特に禅宗ですね。「無」と「空」は本当は違うんですけど、「無」っていうのは「空」の中国的理解ですよ。そして禅宗では座禅なんかやってね、自分をむなしくする。自分をむなしくしてずっとくだっていき、「無」の世界、「無」の境地に入っていくって、降りていって——これも垂直、「下へ」の「垂直超越」ですが——それをやってまた戻ってきて、人と人との関係、人と自然との関係、それを取り戻す、こういう関係になっている。

これが西と東における「精神革命」の典型的な遺産で、今日までずっと続いていることは皆さんご承知の通りですね。「上への超越」はキリスト教、イスラム、それからヘブライ、元々ユダヤなんかはみんなそういうような構造をもっているし、やはり道元の禅宗なんかは「下への超越」であることを皆さんご存じでしょう。

私はこの「縦への超越」、「精神革命」がやり遂げた「神」の発見、あるいは「無」とか「空」とか、そういうことに文句を言っているわけじゃないんです。それはそれで非常に有意義なことであって、その「精神革命」の遺産は今でも生きている

し、さらにそれを研究することだって必要だ。今でもキリスト教の研究は行われていますね。道元なんか大いに流行っているわけですよ。ですから「精神革命」の遺産は今でも生きていて、それを否定するんじゃないやありません。だからずっとこれからも残るわけです。

あるいは「科学革命」もそうです。でき上がったら残る。これから僕はその「科学革命」の方も批判しますが、これもなくなりはいけませんよ、いやむしろ巨大化していく。そういうものは一度確立されたら残っていくけれど、問題は現在、そのままですかっていうことなんですよ。

「横への超越」こそ重要

で、僕の考えでは、今までの考え方を一変させて、人と人、人と自然との横の結びつきこそ根源的なものであり、これを実現する「横への超越」の方が第一次的に重要で、「神」や「無」への「垂直超越」は、その「水平超越」を可能にするというか、それを強めるというか、あるいは支えるというか、そのために二次的にこの「精神革命」によって作り出された、こういう考えです。

こういう考えは、おそらくここで初めて言われることでしょ。うね。こういうところに至るには、僕が最も尊敬する神学者の一人である八木誠一さんとか、いろんな仏教のほうの人という

いろ話し合ってきているんですが、そういう人たちはすごく先端的なところに行っていますよ。並みの神学あるいは仏教の説を言っているわけではない。ある意味ですごく揺らいでいますね、揺らいでいる。でも僕のように言っていないですね。だから、僕が本を書きつつ言ったら、送ってくれとその人たちが言われています。

さらに言えば、今日の文化文明的状况において、東と西の宗教的対立とか、宗教の派閥的な対立、これがやっぱり問題になっていきますし、これからだんだん大きくなるかもしれない。地球社会を作っても、宗教の対立が大きな妨げになるとか、そういうことがあるかもしれない。だから、「科学」と「宗教」の不毛な拮抗、「科学」と「宗教」が結びつかないで互いを相手にしない、そういうことを根本的に超えていくものとして、この「横への超越」を考えたいということです。

「宇宙連関」

そしてこれも根拠がなきゃいけないわけです。この「横への超越」の根拠・根源として「宇宙連関」というものを提起しておきたいと思うんです。人と人、人と自然とを結びつけ、「水平超越」を可能にする「宇宙連関」(cosmic correlation)ですね。ドイツ語で言うところのkosmischer Zusammenhangですか、あるいはZusammenhängeと複数にしといた方がいいかな。「宇宙連

関」は具体的にはたくさんありますからね。

それは一体どういうものなのかというと、それはですね、宇宙のビッグバンから始まって、今日の人類社会ができて上がるまでのあらゆる関係形成、相互的な連関です。一番下では素粒子ができ、その素粒子が結びついて原子ができ、原子と原子が結びついて分子ができる。

さらに生命の段階に入ってきて、細胞と細胞が結びつく。これは日本人がやっている研究、ノーベル賞級の研究で、僕は読みましたけど、この研究はずいぶん進みましたね。細胞と細胞が相互作用して結びつくようになっていますよ。そして生き物を作っているわけです。そして生物相互の結びつきですね。これは生態学がやっているんですけど、どんどん進んでずいぶん詳しく研究されるようになっていく。

そして霊長類がどんどん発達して、最後にとうとうか、われわれ人間同士が持つ結びつき、社会の形式が生まれました。この研究もずいぶん進んできましたね。

こういう様々な層の結びつきがあって、それが新しいものを作っていく。それをあえて大和言葉で「ともいきのきずな」と、こう呼んでおきたい。ひらがなでもいいです。「ともいき」、一緒に生きる、生きようとする、「きずな」です。

「ミラーニューロン」の発見

この宇宙の規模での連関の構造は、現在の素粒子論や生命論や生態学、動物行動学、認知科学、脳神経科学、そういうものの非常な発達によって、昔では考えられなかった新しい発見がどんどんできあがっていく。

その一例として脳神経科学の中からの例として、たとえば「ミラーニューロン」の発見というようなものがあるんです。これは立木先生が本を訳されているし、研究もなさっておられるので、この所員の皆さんは大体知っておられるだろうと思いますので少しだけ言及しますと、これは一九九〇年代、最近です。パルマ大学のジャコモ・リゾラッティという人のグループですけど、彼らは運動を支える脳神経が、どの運動に対してどこの神経が興奮して発火しているかという、その関係を調べました。

ある時、実験者が餌をやるうとして、餌をつかみ取った。つかみ取ったら、その餌をもらう猿の方の同じ脳の箇所、F5野というところが興奮してゐるんです。見ている方の猿が実験者と同じことを感じている、こういうふうに言っている方もいかもしれませんね。実験者の脳のニューロンの活動する部位と同じ部位が被験者である猿の脳において、まるで鏡にうつし取ったように活動している。

この「ミラーニューロン」の現象の発見は、最初は偶然にな

されたんでしょね。だけど、そういう実験をやっていくと、猿と人間だけじゃなくて、人間と人間の間にもそういう「ミラーニューロン」的な現象が起こっていることが分かっていた。たとえば学習という物を習う時に「ミラーニューロン」が働くとか、感情の制御においても働いていることが実証された。

たとえばある人が悲しんでいるとしますね。A君が悲しんでいる。A君が悲しんでいるときに、大脳のどこの位置が発火しているか、これはfMRIなどを使って場所は分かります。分かりますが、それを見て「かわいそうだな」と思っている僕の脳も同じ箇所が発火しているんですよ。「ミラーニューロン」でね。鏡にうつし取ったように。だから、その時私はその人の悲しみと同じ悲しみを、もちろんその強度は本人と観察者では違うでしょうけど、感じている。だから、そこに「同情」とか「憐憫」が生じる。いわゆる empathy、これは流行り言葉になってるけど、感情同化が起こる。

つまり「ミラーニューロン」というのは、他者の意識、喜びや悲しみを直接に理解することを可能にするもので、自己を他者となげける、他者理解の基礎になるもの、こういうふうに捉えていいんじゃないかと思います。昔はヴィトゲンシュタインなんかね、他人のことなんて全然分かんないと言っていました。が、そうじゃないんですね、つながっているんです。「ともい

きのきずな」でつながっている。

宇宙的「つながり」の進化

ではどうしてそういうことが起こるのかというと、やっぱりね、「共通の進化」というものがその背後にある。ある人とある人が一緒に生きて生活しているというと、「共通の進化」というものがあるだろうと僕は考えます。われわれの社会関係というもの、たとえば道徳性の起源といったようなものも、このような宇宙的「つながり」の進化の結果として生じているということになるかと思う。

そして、もちろんこうした「宇宙連関」の諸相は、最近の諸科学や諸学問の領域でまだ各個別分散的に研究されているだけだが、これらの成果が次第に統合されるなら、その全貌もやがて明らかになるだろう。そして、そのようにして明らかにされた「宇宙連関」こそが「横への超越」を可能にする根源だと認められるときが来るんじゃないかと思う、というのが僕の予想なんです。

で、この「宇宙連関」についてまず注目すべきは、各文化圏の地域性や特殊性に拘束されていないということ、キリスト教の世界でも、イスラムの世界でも、仏教圏でも、それは通底して当てはまるわけです。通底して言うことで、地域性に束縛されていない。だからこの宇宙的相互作用を手がかりとして、

地理的・地域的・文化的差異を超えて、または宗教と科学の対立を超えて、二十一世紀のこれからの人類が共に生きていく、地球的な精神原理が新たに創出されるように思われる、ということなんです。

それじゃあ次のテーマに行きましょう。

「科学革命」

今までの話は、「精神革命」っていうものを、「縦への超越」を絶対化することを背景とするんじゃないかって、これはむしろ二次的なものであって、「横への超越」が根源的なものとしてあるんだという話へ持っていこうとしているわけですが、これからの話は「精神革命」じゃなくて、「科学革命」をこの「宇宙連関」との関係で考え直していこうということなんです。

「科学革命」はここではもう詳しくは言いませんよ。「科学革命」が僕で言えば専門ですからね。科学史をやったときに書いているので、そういうものに任せるけど、十五、六世紀にね、これはヨーロッパだけ、四つの地域っていうんじゃないんだ、西ヨーロッパという特殊西欧的な地域で、十七世紀を中心として、それまでにはない形の学問——「科学」、それが起こったのが「科学革命」、「近代科学」の成立なんです。

それは、十六世紀のコペルニクスの地動説あたりから始まり、十七世紀のガリレオ、ケプラー、それからニュートンらに

よる近代天文学、近代力学の基礎の確立に至ります。それまで古代・中世を通じて支配してきたアリストテレス的な地球中心の天動説に基づく「コスモスの世界像」が全く転覆し、代わって「近代科学」の基礎をつくり上げる「科学革命」が進行するわけです。

デカルトとバイコンの思想

落体の法則の発見は誰がやった、万有引力の理論はニュートンがやった、こういった話は、僕がもう別のところで詳しくやっているから、ここでは措いておきますが、思想的に言うと、「科学革命」は、二つの基本的に新しい原理が創出されていくことによって成立する。それは何か。一つはデカルトの「機械論的自然観」¹、the mechanistic view of nature、自然を「機械」として見る、機械論的世界、これですね。

もう一つの新しい柱は、フランシス・バイコンが唱えた「自然支配の理念」the idea of dominance over nature です。自然を支配する、そういう権利を人間は神様からいただいているんだとバイコンは考えた。

アリストテレスの科学のように、全く自然を変換する力を持たず、ただ観照的に見て、スペキュラティブに、自然的に考えているだけで変革も何もしない、こんな科学じゃなくて、「実験」というものを通して、つまり、自然を解剖するというふう

に言ってるけど、「実験」というものをしてね、そして知識の力を自然の中に浸透させる「力としての知」² scientia potentia、これを見出さなきゃいけない。そのことによって自然をいろいろと加工し、変化させ、再編し、収奪し、その上に「人間の王国」を建てよう、こういうことを言ったわけですね。これは成功しましたよね、「近代科学」として。

「科学」と「宗教」の対立の起源

デカルトの「機械論的自然観」は、できたときは神様がいたんですよね、まだ。デカルトは神を否定しない。この世界は「機械」だって言っているけど、デカルトの場合はその「機械」を動かすものに神様がいるわけです。

だけどそこから「啓蒙思想」³ Enlightenment っていうのが十八世紀に出てきて、そんな神様なんか飛び出して来て説明するんじゃなくて、人間理性、human reason、これだけですべて説明しようとした。

たとえばヴォルテールなんかがそういう啓蒙思想を主張して「醜悪なるものを破壊せよ」——その醜悪なるものっていうのは教会的なものという意味ですよ——それをぶち壊せ、神様のせいにしていろんな原始自然現象なんかを説明するんじゃない、人間理性なんだ、神様はもうどこかに「棚上げ」しよう、大体そんなおとぎ話のようなものを教会の中でまだ話してい

る、そんなものはぶっ潰せ、というふうにして、この「啓蒙思想」の成立で、「科学」と「宗教」の対立が初めて起こるわけです。

それ以前の思想、それ以前にも「科学」があったと言っているんですよ。ギリシアにはギリシア科学、中国には中国科学、インドにはインド科学、イスラムにはイスラム科学、中世には中世科学。そこに、どだい「宗教」と「科学」の対立なんてあったらどうか。ない、なかった。イスラムなんか、全然対立はないんであって、一つのもんですよ。

ただ、皆さんがちょっと気になるのはギリシアでしょう。デモクリトスっていう人がいて、「原子論」というものがある。ちよつとこの機会に付け加えておきたいけど、デモクリトスの「原子論」っていうのはですね、デカルトの微粒子の世界、機械論的世界とは全然違いますよ。

デカルトの「機械論的自然観」

デカルトは、世界を「延長」に還元した。「延長」っていうのはどういうのかというと、形、大きさだけを持った、幾何学的に広がっていることですよ。この「延長」を細かく切っていくと微粒子になる。その微粒子のいろんな結びつきでもってこの世界のすべての現象を解釈しようとする。そこでは「実体形相」という、自然のなかの魂的なものなんか、みんな取ってし

まって、一樣な「延長」に還元しておいて、それを微粒子の離合集散、つまり、ダンスによって説明しようとする。これがいわゆる、近代の「機械論的自然観」です。

「思惟」と「延長」の矛盾

デモクリトス、ペイコン、デカルト、近代の復活、と書いてある。だけどデカルトには、「我思う」という「思惟」(Cogitatio)と、それに対立して脱生命化された「延長」の世界があるんです。

「我」の方は考える、「我思う故」で、考える。これは「思惟」なんです。これもおかしな話で、デカルト、考えるっていうと生きてなきゃならない、生命じゃなきゃならない。思惟の根底には生命がある。生命っていうのは、その分子みたいな粒子がいろいろやって、っていうんだったら、これどうすりゃいいんだっけということですよ。だから大脳の存在ですよ。これを基礎として思惟が起こるので、思惟がそれだけで動いているってことはない。デカルトはなんか忘れてるんですよ。

デモクリトスとデカルトの対比

それでさっきのデモクリトスの話に戻ると、デモクリトスはいね、まあ、世界は水でできているとか、世界は火でできているといった自然哲学がありました。が、いっさいの事物の生成変化

は、無数の質を同じくする不可分な「原子（アトマ）」の形、大きさ、運動といった量的なものへと還元され、不変同質な原子の因果的運動によってすべて単純明快に説明されるとしたんです。

十七世紀には、対象を「機械」として支配し、人間は自然の主人になったってことをデカルトは言っている。だけど、デモクリトスはそんなことは全然考えていないんですよ。第一、デモクリトスは神を認めているんですよ。神はどこかほかのところにあつて、それは自然哲学の考え方の中の一つとして出しているんで、デカルトみたいな世界観としてじゃないんですよ、ということをちょっと付け加えておく。僕はこのことを、ここから出した本に書いていないので付け加えておきたい。これを読んだ人がこれはどうかと思うことがあるかもしれないから。

「要素還元主義」から「統合論」へ

それで、結局目的はどういうことになるかっていうと、「機械」はいろんな要素の結びつきでできているから、その要素はどんなもんですかってことを調べれば分かっちゃうっていうんで、「要素還元主義」なんですよ。これは当初重要でしたよ。物理学でも生理学でもなんでも、要素の確定っていうのは重要じゃないですか。で、デカルトの「機械論」はこれをやりました。ですから機械論モデルは、「近代科学」を作るときに非常

に大きな力を持ったんです。

だけど今はね、要素の確認より要素と要素の関係、結びつき、そのの方が重要になって、要素に還元する「要素還元主義」っていうものは、むしろ批判される。要素に還元するだけじゃ、ことは進まないんでね。要素と要素の結びつき、素粒子と素粒子はどんなふうに関係するの、これが非常に大きな問題です。そういう結びつきを研究する。

要素はもう大体全部分かった。分子生物学で要素、遺伝子は、だんだん分かってきた。それがどういうふうに関係しているか、エビジェネティクス、そっちの方が重要だということになってきた。それから細胞と細胞の間の情報研究、さっき言ったように、霊長類の集団研究、それから人間同士を結びつける社会脳の研究、こういう関係性、つながりの研究が重要なんです。

それらを機械論的な「要素還元主義」、reductionism に対して、「統合論」、holosophy、書かなくてもいってよう、holon（全体）と sophy（知識）で holosophy（統合論）——僕が作った言葉なんですけど全然流行っていません——が要請される。

このようなつながりの研究をさらに層的につなげていけば、それがここで言う「宇宙連関」となる。現在の「科学」は、このような「宇宙連関」を様々な局面において研究し明らかにしたと言える。

ベイコンの「自然支配の理念」

さて、それからもう一つ、ベイコンのほうについてちょっと言っておかなきゃいけないね。これも批判の対象になる。つまり「自然支配の理念」です。人間は神様から自然を支配する、征服する権利を与えられているというわけで、「実験」によって自然に浸透する「力ある知」を蓄えて、それで自然を改造して、その上に「人間の王国」を建設しようとした。これはもうロイヤル・ソサイエティに受け継がれて、「産業革命」の出現によって、またその発展によって実現された。今だったらIT科学ですね。先端科学、ITやなんかによって、十分過ぎるほど進んできたけど、しかしこの「力ある知」によって長く収奪され続けてきた自然は、今や耐えかねてガラガラと音を立てて崩れ去ろうとしている。それが現在の環境問題ですよ。この「力ある知」でもって、豊かな世界をつくる、そのために自然を収奪、使い捨てる、と言ってもいいよね。

「科学」と「技術」

このことについてももう一つ注意すべきことは、今「科学」っていうのは、「科学技術」っていう言葉で言われることが多いです。そしてこの「科学技術」という言葉はいつたいどっちに重点があつたかかっていうと、「技術」の方に重点が置かれ、「科学」はそれをこう、何ていうのかな、支える補助的なものか

な、それよりも「技術」が重要であるという考え方。こういう世の中、IT社会っていうのもそうですね、先端コンピューターを持つていった先に、先端技術が人間を超える、人間能力を超える。で、シンギュラリティ、あと二十年後くらいにそういう時代が来ると言われている。

だけど、ここで注意したいのは、「技術」っていうのはあくまでもやはりね、ITを含めてですよ、みんなが使う道具なんです。その道具が人間を使う、これは逆転なんです。あつてはいけない。またありえないと僕は思う。で、「科学」というものはどういふものかかっていうと、やはり、この「宇宙連関」を研究するものであつて、ね、「技術」の奴隷じゃない。

ところが、ベイコンの「力ある知」の理念が浸透発展して強化されてきたことで、逆転現象を起こしてしまっている。これは非常に危険なことだというふうに思っている。このように、「科学革命」については、まず「機械論的自然観」の克服ということが一つあるけど、もう一つ、ベイコンの「自然支配の理念」というものの、これが転換されなければならない。

だからそれが「環境革命」なんです。結局ね。「環境」を支配の対象とか、そういうものとして扱っくんじゃなくて、「環境」と「人間」とは一体のものなんです。むしろ。で、共生している。まさに「ともいきのきずな」だね。そういうものではない。まことに。そこへ行かなきゃいけない。で、「科学革

命」も、だから「近代科学」のあり方も、変わらなきゃいけない。こういうことになるんですね。

結論

さあ、あと十分で終わりにしなきゃいけないんで、結論に入りますけど、今日僕が話した内容の核心はですね、「宗教」と「科学」は、「宗教」と「科学」っていうふうに言って、何か分離・対立して、もうどうしようもなくなっていると考えられるものがこのままずっと続くんじゃないかって、その間に「宇宙連関」という共通項を導入することによって、両者の統合への道が開かれるんじゃないか、こんな話なんですよね。で、そういうアイデアっていうものが、全く新しくここに提出されるわけですから、今から皆さんの間に受け入れられるのかどうか分からないが、これから十数年も経って、まああるいは百年ぐらいかな、経って、で、この宗教間の対立だとか、「宗教」と「科学」の抗争とか、そういうようなことがどうにもならなくなつたときに、あるいはこんなことを考えていた人間がいたのかということになるかもしれない、そのために今申し上げているわけですが、そうなるかどうかは分かりません。

まずこの「宇宙連関」と僕が言ったものは、まだ完成されているわけじゃないですよ。なんかそこにあるものをこつちこつち持ってきていいんだっていうわけじゃないんですよ。それは

今検証されているわけですよ。これからの研究によってまだまだ残っている多くの隙間が埋められるかどうかということがある。しかし「ビッグバン」から「社会脳」の形成に至るまで、素粒子から我々の社会まで、それがひとつながりの連続であることは、進化の歴史を顧みても、今や確実になってきているんじゃないでしょうか。

まだでき上がっていないけど、「ビッグバンストーリー」っていうのが今書かれていますよね。実は僕もこの方向なんだけども、かなり前にこの方向を打ち出している。詳しい記述は僕はしていませんが、他の外国の、イギリス、オーストラリアのいろんな人たちが「ビッグバンストーリー」、ビッグバンから社会の形成までを通して歴史を捉えるという、これがすでになされている。そういうことができるようになったんですね、知識の集積によってね。

だけど、一体、この様々な段階の相互作用によって、この大きなつながりの体系としての「宇宙連関」はどうしてでき上がっているんだろうか、一体何がそのつながりを作っているんだろうか、というのには、一つの驚きであり、謎でもあると僕は言わざるを得ない。ここで僕は人格神を持ち出してこようとは思わないが、一種の something great を感じざるを得ない。しかも、何もそのことによって神秘主義に陥るんじゃないかって、諸学問の努力によって一歩一歩解決されていくべき偉大な事実な

のである。で、「宗教」のところでも論じた「水平超越」は、この「科学」によって明らかにされる、まだされきつたわけじゃない、されつつある「宇宙連関」の果てにある、とこう言うのもいいだろう。こういうことですね。

アディショナル・デスカッション―「二重真理説」について

さて、ここでもうおしまいにしてもいいかな。あるいはあと五分だけちょっとやる。あの、これ僕、服部先生から今日論文をいただいで読んで、それに触発されて申し上げるわけだけど、中世末期に「科学」と「宗教」の共存が「二重真理」っていう形で出されたわけですよ、ウイリアム・オヴ・オッカムによって。だからもう「科学」のことは「科学」のこと、「宗教」のことはもう「宗教」のこと、真理は二つ、二重にあるんだ、とこういうことなんだが、それに対して僕は、それが今や破綻していると言いたいです。

「二重真理」の世界が駄目になる、駄目になんきやいけない、ということとは、一応「科学」というのはどういふものかかっていうと、「この世界がいかにあるか」ということを研究する。いろいろな方法でね。数学だとか、実験もして明らかにする。それは客観的なもので、作られた結果は共有される。

それに対して「宗教」は「この世界においていかに生きるべきか」、こっちは「生きる」、「生きる」んだよ。「ある」じゃな

い。「生きる」。「生きる」結果を追求するもの、と、こう捉える。

で、なんか「二重真理」的な考え方を持とうとしても、僕が考えるに、この科学的研究っていうものは客観的であるけれども、価値中立的じゃないという、やっぱり「価値」の問題があるわけだ。

それが、原子というのはこんなふうな構造をしています、中性子はこうで、そこからこう力が出るんですよ、研究するのはいいとしても、それを使って原子爆弾を作る、それで何十万の人が一遍に死ぬ、マンハッタン計画がそれをやった。そんなことをやっていいんだろうか、「科学」は、ね。「世界は何であるか」を研究するのはいいけど、そういうふうにしてそんなものを作り出したら大変なことになる。だから、科学者が対象を研究するとき、それが人類のためになるのか、あるいは地球のためになるのか、ならないでそれをむしろ破壊する、そんなものを研究しちゃいけないわけ。二度と研究しちゃいけないですよ。いや、作っちゃいけないんですよ。ああいう……。今そのために苦しんでいますけどね、核兵器にね。ロシアによるウクライナ侵略でもね、核兵器、核兵器って脅している。こんなこと、二度とあつてはならない。

だから、「いかに生きるべきか」っていうことがやっぱりそこで問題になるんです、「世界はいかにあるか」を研究すると

きにね。それはその人の生きる「生き方」ですよ。科学者の。それがやっぱり問題になってくる。

逆に、宗教家の側でも、「いかに生きるべきか」ってことを抽象的に、それだけをお題目で、ドグマとして唱えるだけじゃなくて、やっぱりこの「世界がどうあるのか」っていうことを正確に認識して、「どう生きるべきか」を決めなきゃいけない。宗教の役目がどういうものかってことを、そういう事実の認証として、確実に捕まえなきゃいけないわけです。なんか今までに作ったドグマをただみんなに強制しているだけじゃいけない。ですからそういう二つの分かれたものは、分かれたものが、離れてはいない、結びつかなきゃいけない。

こういう点で、「科学」と「宗教」は、結びつかなきゃいけない。結びついていく道を探らなきゃならない。「二重真理」に安んじていることはできない、とこういうことだと思う。ちようど時間になった。これで終わりにして、あとは質問を受けて、ということになります。どうぞ。

質疑応答

竹中信介(司会)：伊東先生、どうもありがとうございます。前半、「精神革命」の話から始まって、次に「科学革命」、そして「二重真理説」を超えていく方法を示していただけたのかな

と思いましたが。ありがとうございます。それでは会場からの質問を受けたいと思います。二十分ぐらいですが、いかがでしょうか？ では中山先生どうぞ。

中山理：先生から素晴らしいお話を拝聴し、感動いたしました。先生のご著書(『伊東俊太郎著作集』麗澤大学出版会)を拝読し、ずっと疑問に思っていることがありますので、この機会に質問させていただきます。それは、先生がおっしゃっているように「科学革命」の結果「産業革命」が起こったのですが、その実態は何であったかという「物質」と「エネルギー」の極大化であった、と先生は書いておられます。そして今「情報革命」が起こっているのですが、それは「知」の極大化であり、本質的には同じ路線にある、ということでした。そこで西洋の十七世紀の科学革命に影響を与えたフランシス・ベーコンは自然に対し human dominance over nature というスタンスをとりましたが、これから AI とコンピューターによる支配の時代を迎えると、computer's dominance over human beings になるんじゃないかと危惧するわけです。レイ・カーツワイルというアメリカの発明家で未来学者が、二〇四五年にシンギュラリティが起こって、人間の脳と同レベルの AI が誕生すると言っています。

では、その後、AI が更に進歩するとどうなるのか。AI が人類の英知を超えてしまったら私たち人類の未来はどうなるの

かが心配なのです。「知」の極大化に対して、私たちはどう対応したらよいのかというのが、私の質問でございます。よろしくお願いします。

伊東…ありがとうございます。今のご質問、大変意義のある内容で、「知」の極大化というけど、「知」には、僕は「良い知」と「悪い知」があると思う。これ、「知」という一語で言っただけ、これが増えればいいっていうようなもんじゃ決してないんです。世の中にはね、科学が追求する「知」もそうだけど、「悪い知」と「良い知」とある。

で、「悪い知」とはどういうものかっていうと、そんな「知」を拡大させたら人間が消滅しちゃう、地球が破壊される、生態系が駄目になる、などなど、マイナスの効果を生む。そんな「知」をね、推し進めてもしようがない。これは科学者の倫理の問題にもなるが、そういうことです。

「良い知」っていうのは、それによって人間が苦しみから少しでも解放される、そして楽しく生きられる、そういう社会、あるいは地球を保存していく、そういう「知」が「良い知」なの。だから、「知」というものをやっぱり仕分けしなきゃいけない。それで、科学者は「良い知」を追求していかなくちゃいけないんで、やっぱりその時に「価値判断」しなきゃいけない。

で、「価値判断」しないでね、なんでも与えられた問題だから、数年間やって解けるんだって、やってた果てに、原子爆

弾、その他いろいろあるけど、ができてしまうという「知」でもあるんだから、科学は。「悪い知」にもなり得るんだから、これを区別していかなくちゃいけない。

そして、我々は、単純な「知」の礼賛ではなくて、その「知」の区分け、これをね、はっきりさせなきゃいけない。だから科学者にもそれ、僕、要求したいですよ。「あなたがやっていることは無条件に価値があるとか、いいことだとは言えないよ」とね。「自覚してください。あなたが科学をやるのはどうしてなんですか。なぜそれに自分の人生をかけますか。これを考えてください。」こういうふうに科学者に言いたい。まあそういうことを自覚している人もいなくはないだろうが、すべての科学者がそういう問題を自覚しているというふうにならないかならない。科学をやっているんだからいいでしょ、こういう話では、これはだめです、ということになります。

中山…どうもありがとうございます。

伊東…はい。いい質問をいただいた。その他には。

竹中…ありがとうございます。それでは、他の方はいかがでしょう？「精神革命」だけでも、もつと一時間でも二時間でも聞いていたいと思うのですが、今日は「科学革命」も含めての議論でしたので、かなり広範な話題になっていて、すごく充実していたと思います。どんなところからでも結構です。では田島先生から手が上がりましたので、どうぞ前の方に。

田島忠篤：今日お話しにならなかつたことで、先生がどういふふうにお考えになつてゐるのかつていうことをちよつと質問させていただきます。古代から「真」「善」「美」つていふふうに言われています。今日お話の中で、「真」というのは科学的に求める。それからあと、「善」つていふのは宗教的なことで、で、今日お話の中で「精神革命」つていふことも加わると思ふんですけど、「美」つていふことに関して今日お話しにならなかつたと思ふんです。その、「美」の位置づけつていふのは、「精神革命」の中、あるいはこれからの「科学革命」以後の、環境も含めてどういふ位置づけになるのかつていふことについて、先生のお考えを聞きたいと思ひまして。

伊東：そうですね。おっしゃる通り、僕は今日、「善」については言ったかもしれない。まあ「真」についても言った。だけど「美」については十分言つていない。これは確かにおっしゃる通りです。じゃあそれに対してどう考えているかというところ、こういうことでしょうか。

たとえば、ミラーニューロンのときに話した、憐憫、empathy っていうものがあつて、そして、ある人の苦しみを一緒に苦しむ、ほつとかなない、一緒に苦しむ。これはね、「美」ですよ。単に「善」じゃない。麗しい、それは麗しい行為なんです。「美」です。それからやつぱり、あの、この地球をね、地球が収奪されることなく、美しい山や、美しい森、そういう

ものが保存されるように努力する。まあ生態学者とか、民族学者とかいいますが、それ、「美」を作つていふと思う。

だから、何ていふかな、この「美」の本質つていふものは「共感」だと思ふんですよ。一緒に感じる「共感」で、これ一種の empathy ですよ。感情移入です。

そういうわけですから、僕は「善」と「真」だけしか論じなかつたと言つたが、本当の「善」は美しい。そして本当の「真」は美しい。だから、そこに「共鳴」ができる。われわれが「共鳴」できる。それが「美」じゃないでしょうか。だから「美」といふものが抽象的に存在するわけじゃないですよ。たとえば、絵が美しいといつて、こう一幅の絵を見るのは、その中に自分がこう、empathy っていうかなあ、「共感」するわけですよ。「共感」するからそれを認めるわけですよ。そういうものがあつて、そういう「共感」の共有というのが「美」だと、こういうふうにかつていふかがでしょうか。

そうすると、「美」の問題は、「真」とか「善」と遊離してあつてわけじゃないつていふことですね。僕はあの、アインシュタインの相対性理論の本質なんかね、もうあれは「美」ですよ。あれ見ていると、美しいですよ。ですから、そういうものとして「美」をとらえたらどうだろうか。そうすれば、「善」と「真」と無縁なものじゃないということが言える。これで答えになつていふかどうか。

田島：ありがとうございます。

伊東：服部先生、何かありますか？

服部英二：本当に今日の「精神革命」と「科学革命」の対比というのは、根本的な問題だと思っただけです。で、実はこの二つが矛盾しているのではないかと考えているのです。ね。ですから、本当はもう「科学」は「精神革命」と関係ないと考える人、大抵現在の「科学」が、地球環境を破壊し、生物化学兵器でもって人を殺し、枯葉剤で虫も殺し、人も殺し、原爆というものを作り出して、広島、長崎というような惨事を招いた。これが「科学」ですね。これが「精神革命」と関係あるかということ、ない。

伊東先生の「五大革命説」では、最初の四つの革命は世界各地にほぼ同時多発的に起こっている。それに対して、第五の革命である「科学革命」だけはヨーロッパという一地域だけに起こったという指摘なのですね。では、それはなぜその一地域だけに起こったのかということを我々は問わなきゃいけない。で、私はその中に、伊東先生ともお話ししたんですけど、同意した点があるのです。

やっぱりヘブライ、キリスト教という非常に強固な「宗教」があつて、そこから生まれた「道徳・倫理」というもの、「神話」というものがありますね。これが我々にとつても、「倫理」の基になっているのだけ。それと「科学」というものがあり

ます。実は「自然科学」というのは十七世紀じゃなしに、十五世紀ぐらいから徐々に起こってきたものですね。「自然科学」の発達とキリスト教神学の間に関係する認識の戦いが起こった。これを、「二重真理説」と言います。つまり、「倫理に関わる真理は教会」、「倫理に関係ない真理は科学」という二つの基準、つまり「棲み分け」です。「二重真理説」というもの、これが元凶だと思つたのです。

で、実は最近、私がNHKの「視点・論点」でお話しした時使った表現なんですけど、「科学は善悪に関する免罪符を得た」のです。これが私が最近申し上げたことなのです。長い葛藤を経て十七世紀にその時が来ます。「科学革命」でもって「科学」が勝利する。「教会」に対してです。これがヨーロッパで、その「科学」が、発射台から発射されたロケットのように上昇したこの原因ではないかと、こういうふうには私は思っております。で、伊東先生の学説にはほぼ私、同感なんです。伊東先生は最後に、この「科学革命」だけでは駄目で、今は「環境革命」に行かなければいけないといわれた。これは人類の意識革命ですよ。

皆さんも知ってほしいと思うのは、ガブリエル・マルセルが「科学」と、ミステール、「神秘」を分けて、非常に明確な区別をしているのです。目の前に置けるものを見るのは「科学」。絶対に目の前に置けないものが「神秘」、ミステール。こうい

うことをはつきりと言っているんですね。これは私は非常にいい指摘と思います。

だから、「科学革命」の「科学」、十七世紀のデカルト、ペイコン、こういう人たちがやったことは、本来は目の前に置けないものまでも目の前に置いたということですね。大自然というものは、我々が生きて、その中に生きているから、目の前に置けるものじゃない。それを置いた、目の前に。客観化、客体化した。客体化できないものを客体化したというところに、今日のテーマであった「科学革命」の大問題があると思うのですよ。

で、それを伊東先生が非常によく説明してくださって、私も共々、もう二十年になりましたよかね、勉強させていただいております。ですから、今日は本当に私、二年ぶりにお会いできて嬉しく思っておりますし、今後ともよろしくお教えください。どうもありがとうございます。

伊東…ありがとうございます。いや、僕も久しぶりに先生にお会いできて非常に楽しかった。皆さんとも、ねえ、本当に久しぶりで、皆さんのお顔を拝見することができて嬉しかったです。ここはいい会ですよ。うん、僕はそう思う。ここで、研究会で発表したものが僕の論文に次々になって、今、今度いよいよ中央公論新社から出るようになった。大変刺激し合ってね、そしていい結果を出しているいい研究会だから大事にしてくだ

さい。なかなか僕ももうこんなふうな状態で、出ることは難しくなるかもしれないけど。ええ、発展することを祈ります。じゃあそういうことで。

竹中…はい、先生、最後に励ましのメッセージまでいただきまして、ありがとうございます。（拍手）それでは時間となりましたので、これで解散いたします。本日はどうもありがとうございました。

*掲載にあたって

本講演は、令和四年五月二十五日に道徳科学研究所（道科研）において行われたもので、道科研における伊東俊太郎博士の最後の講演です。本稿は、伊東先生没後の出版であるため、著者校正を依頼することがかなわなかったため、講演の録音をもとに伊東先生の著作を参照し、編集者の責任において編集と校正を行いました。講演の内容を正確にお伝えすると同時に、できるだけ講演者の言葉がそのまま伝わるように心がけたつもりですが、配慮の至らない点はお赦しいただきたいと思えます。

掲載を快くご許可いただきました伊東俊太郎先生のご家族にこの場を借りて御礼申し上げます。また、編集・校正を進める上で、道科研の立木教夫客員教授、竹中信介研究員にご指導、ご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。

編集委員会 宗 中正（本稿編集責任者）

